

さあ、また新しい心で

馬場あき子

一九七八年五月の「かりん」創刊から四十年経った。初期から「かりん」に拠って歌を発表してこられた方々にとつては、この四十年という歳月はすでに歴史という重みを感じておられることだろう。当時二十代だった新人が六十代になるといふ深い人生の時間でもある。それを思えば感慨はひとしおだが、人間が一身に負う歳月の累積とはそういうものだ。

しかしまた、「かりん」の四十年とは何であったか、それを振りかえるべき時がきていることもたしかである。「かりん」の若い歌人たちが自由に討論しあっているすがたを外から眺めているうちに、そこから何か生まれてきそうな期待感が盛り上がってきているが、一方でまた、近年の歌集の出版意欲に目を移せば、歌歴を積んできた方々が自覚的に一つの段階を意識し、次のステージを目指す動きも顕著である。

「かりん」はいま、一つの大きな飛躍の時期を迎えようとしているようだ。若い力と、中堅の方々の危機感にみちた達成への意欲と、重厚な歳月を重ねてきた方々のどっしりとした志向とが、つかず、はなれずの絶妙な垣塙をなしているのを感じている。

昨秋、「かりん」創刊者の岩田正が急逝したが、これを機として、「かりん」の先人たちの仕事や、その人生への接近と研究もはじまるような予感もたれる。「かりん」は本来、一つの理念や方向をもって創作することは考えない方向で創刊されたが、これからも個々の個性の伸長をはかりつつ、時代を生きる視野と豊かな人間性を求める方向を失なわず、短歌という詩形がより豊饒な今日性を持った様式となるよう、論と実作の力を培ってゆきたいと思っている。

さあ皆さん、また新しい心をもって作歌に向っていきましょうではありませんか。